「　　」を失くした魔女

永音 律樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「　」を失くした魔女

【Ｎコード】
Ｎ７８１３Ｗ

【作者名】
永音　律樹

【あらすじ】
”魔女”とは――「悪魔と契約し、得た力を用いて災いをなす存在」で、「カラスや黒猫を使い魔と」し、「大鍋でトカゲなどを煮て軟膏を作」ったり、「箒にまたがって空を飛」んだりする、「黒い三角帽と黒マント姿の鉤鼻の老婆」……だそうです。うわぁ、偏見も甚だしい！　先入観だけで人を語らないでほしいものですね！！

？（前書き）

誤字脱字等がありましたら、お知らせ下さい。

？

むかしむかし、世界はとても平和で、皆は穏やかな変わりのない日々を過ごしていました。
そのために神様は大変暇を持て余していました。
ある日、神様は気まぐれに私達から”あれ”を取り上げてしまいました。
”あれ”を失くしてしまったのならば、皆生きていられないだろうと不意に思い付いたからです。
けれども神様の思惑とは裏腹に、皆は”あれ”の代わりを作って穏やかな日常に戻りました。
神様は面白くなくなって、今度は何をしようか考え始めました。

”あれ”を返されていない事も忘れて、今皆は平和な日々を過ごしています。

軽くはない木の扉を押し開けて外に出る。視界が急に光でいっぱいになり、思わず目を細めて手で庇を作った。今日も太陽は元気にまぶしく輝いている。私はあまりこれが好きじゃない。
澄みきった青が広がる雲一つない空をにらんでいると、後ろから温かみのある声が降り注いできた。
「ソルシエさん、いつも有難うね」
「いえ、気にしないで下さい。私の方もよく色々やってもらっていますから」
「そう？　本当に大丈夫？」

「はい。けど、近々また頼み事をすると思うので、その時はよろしくお願いします」
「……分かったわ。何かあったらすぐ言ってちょうだいね」
「はい」
パルトノイさんの安堵に満ちた顔を見て、私も自然と口元がほころんだ。朗らかな笑顔に微笑みを返し、前を向いて歩き始める。しばらくしてから扉の開閉音が耳に届き、私は笑みをかき消した。こんな町中で笑ってなんかいたら、誰に何を言われるか分かったもんじゃない。
　そんな事を考えていたからか、今最も会いたくない人の声が後ろから聞こえた。
「……何故、貴様がこんな所にいる」
険しさを多分に含んだ重量感のある声音に、私は気付かれないように小さく息を吐いた。嫌な予感ばかり見事に的中するのは何故なんだろう。”神”様が何かいじわるしてるんじゃないだろうか。
「ソルシエ、さっさと答えろ！」
うわぁ、人がちょっと遠い目をしている間に堪忍袋の緒が切れたらしい。全く、本当に短気な人だ。絶対にカルシウムが足りていないよね。毎日牛乳を2リットル以上飲む事を推奨します。
「そんなに大きな声を出さなくても、十分聞こえてます。でも、あなたのどーでもいい質問に答える義理は皆無だと思うんですが」
「何だと？」
やれやれと言った風に肩をすくめて振り返ると、精悍な顔立ちの青年がこめかみを引きつらせてながら手を剣にかけていた。
　焦げ茶の髪にやや吊り上った鋭い瞳。いつもは冷酷なまでにクールな容貌は、募る苛立ちから僅かに赤みを帯びている。背は見上げるくらい高くすらりとしていて、鎧の上から分かるほど体つきもがっしりしている。悔しいが私の目から見てももの凄い美形さんだ。ただオールバックなのはどうかと思うけど。今はまだ平気だけど、

いつか居たたまれない事になるよ。あと気が短すぎるのも良くないね。それさえ改善出来れば、非の打ち所がない人だと（個人的には）思うんだけどなぁ。

「……パルテノイさんの所に、薬を届けに行ってきた帰りです。っていうか、あなたにこんな事詮索される筋合いはありません」
「貴様が毒物を配り回っているかもしれないだろう」
「私が渡した薬による怪我人や死亡者は、今までに一人もいませんよ。それはよくご存じでしょう？」
冷ややかな目でルィツァを見やると、ぐっと詰まらせた表情を浮かべた。しかしそれは一瞬の事で、すぐにすくみあがるような目でにらんできた。私はそれに怯む事なく言葉を繰り出した。
「ともかく、あなたが私にどうこう言える権利は全然ありません。私だって一人の人です。あなただって民を守る騎士の一人なら、人権を守るぐらいの事はして下さい」
「貴様が魔女である以上、人権がどうこう言える道理もない」
「あなたが騎士である以上、魔女を忌み嫌うのは当たり前……と」
私はこれ見よがしに鼻で笑い、ルィツァに背を向けた。
「他人を苛立ちのはけ口にするなんて、やっぱり器の小さい人ですね。エヴェックさんが私を構うのがそんなに嫌なら、本人に直接言って止めさせるようにして下さい。こっちだって心底迷惑してるんです」
「それが出来ればとっくにしている！」
「なら実力行使でもして下さい。エヴェックさんが自分の忠告を聞いてくれないからって、必要以上に行動を制限され、あなたの苛立ちをぶつけられるのはまっぴらごめんです！」
凄みを利かせられていない目付きでルィツァをにらみ、私はその場を駆け出した。

木の葉がざわめく小道を重い足取りで歩く。折角パルテノイさん

の笑顔を見て気分が浮上したと言うのに、ルィツァのせいで台無しだ。本当に気が利かない人だよ。空気を読め。

自分の世界にどっぷりと浸っていたら、いつの間にか森の入口にある小屋に着いた。見慣れた私の家だが、なんだかおかしい。随分汚れた布をかぶった物体がドアの前に居座っているからだった。すぐにも中に入ってベッドの上にダイブしたいのに、大変邪魔だ。

どかそうとかがんで布を持ち上げる。すると中からうずくまった人が現れた。

？（後書き）

作者がもの凄い遅筆なので大分不定期更新になると思いますが、宜しくお願いします。

？

汚れた布を持ったまま、私は目を丸くして硬直していた。心臓がバクバクと早鐘を打つ。

びっくりしたビックリした吃驚したー！　悲鳴上げそうになるくらいびっくりしたー！　何でこんな所に人がいるの！？　何か用が無い限り、小屋の周辺には何人たりとも近付けないようになっているのに！　……いや、用があるからここにいるのか。

つい品定めをする商人の如く、じろじろと眺めてしまう。砂や葉っぱが絡まっているものの、淡い金色の髪が非常に綺麗だ。こんなに綺麗な人は町でも見た事が無い。金髪は茶髪ほどありふれた髪色ではないとはいえ、とりわけ珍しい髪色という訳でもないんだけどね。俯いている上に所々薄汚れていて顔立ちがよく分からないが、きっと整った顔立ちをしているに違いない。この意見には多分に偏見が混じっているけど。

思わず見惚れそうになりながらも、目の前にいる人が見た事が無いというのが気になった。だが脇に置いてある荷物を見て合点がいく。一寸やそっとで破れなさそうな袋は、明らかにあちこちに行く時に携帯する為のカバン代わりだ。持っている布を広げてみると、防寒用のマントの形をしている。恐らくこの人は旅人さんなのだろう。

しかし、もし旅人さんだとしても、ここにいるのは奇妙奇天烈だ。この町は少し閉鎖気味だが、行商人さん等が来る事はある。その時はこの付近ではない決まった道を通るので、ここに着く筈がない。

だとしたら、この人は一体『どこ』から来たのだろうか。

背筋を冷たいものが駆け抜ける。鳥達が一斉に飛び去り、森が不気味にざわめいた。

とにもかくにも、この人には一刻も早くここから立ち退いてもらわなければならない。でなければ取り返しのつかない事になる。
「もしもーし、聞こえますかー？」
耳元に口を寄せて呼び掛けるが、応じる気配は全く無い。揺すって起こそうと肩に手を掛けたら、糸の切れた人形のように体が傾いで倒れた。
スカートが汚れるのを承知でその場に座り込み、膝に推定職業旅人さんの頭を乗せる。予想通りの端正な顔立ちに息を吐きつつ額にそっと触れると、火傷すると思えるほど熱い。耳の裏や首筋の腫れ具合を確かめ、私は森に向かって声を張り上げた。
「モルテー！　モールテー！？」
風に木の葉がそよぐ。冷たい微風が頬を撫で、露の臭いが鼻腔を満たす。静寂が場を支配していた。
「……仕様がないか」
そろそろと膝から頭を下ろし、家のドアを開け広げた。推定職業旅人さんの腋の下に両手を通し、引っ張りながら家へ引き入れる。一般女子よりも非力な私が、平均以上の高さはあるであろう男性を運ぶのは大変難しく、やっとの思いで我が家で唯一の長椅子に寝かせる事が出来た。その場にへたり込みそうになるのを堪えて荷物を回収し、ドアを静かに閉めた。

推定職業旅人さんの靴を脱がし、毛布をかけ、薬湯を作っている時、突然唸り声が耳に入った。薬をかき混ぜる手と火を止め、長椅子に歩み寄る。靴音で意識が浮上したのか、うっすらと目を開いた。
「大丈夫ですか？」
声をかけた瞬間、推定職業旅人さんが目を瞠り、私の首目がけて腕を伸ばして跳ね起きた。が、熱で体が上手く動かせない事と毛布に引っかかった事とで手が空を切り、勢いよく頭から床に落ちた。重く鈍い音と痛そうな呻き声が響く。私はスカートの裾に気を付けてしゃがんだ。

「……色々言いたい事はありますが、私はあなたに何かするつもりはありません。信用出来ないのでしたら、今すぐ起きてここを出て行った方が良いと思います。荷物も傍にありますから。ただ介抱した身としては、もうすぐ出来る薬湯を飲んで行ってくれると有り難いんですけど……どうしますか？」
推定職業旅人さんに奇異な目でにらまれる。背筋が凍りついて足が竦みそうになるくらい冷たい目だ。しかし、遭遇する度にルィツァとにらみにらまれている私にとって、この程度は大した事ではない。負けじと半眼でにらみ返す。
　しばらくにらみ合いが続いたが、推定職業旅人さんが深く重たいため息を吐き、長椅子に寝直した事で終わりを迎えた。薬湯を飲む事の了承だと勝手に解釈する。つい微笑みを浮かべると瞠目された。失礼な、そんなに変な顔だったか。

「うぇっ、苦っ……」
「文句言わないで下さい。『良薬は口に苦し』です。そんじょそこらの薬よりは効き目があると思いますよ」
げんなりした顔でちびちび薬湯を飲んでいる傍らで、私は呑気に紅茶を飲んでいた。恨みがましく見られるが、こればかりはどうしようもない。折角薬湯を用意したんだから、ちゃんと飲んでさっさと立ち去ってくれないと困る。
　推定職業旅人さんが薬湯を飲み終えた頃を見計らい、私は口を開いた。
「あの、自分が誰なのか分かりますか？　例えば名前とか」
「名前？　オレはラ」
「良いです良いです言わなくて大丈夫ですむしろこの町にいる間は絶対に名乗らないで下さいお願いします」
鬼気迫る言い方に、推定職業旅人さんが黙り込む。変な誤解をされないよう慌てて言葉を連ねた。
「ご免なさい、こちらの都合であなたに名乗られると凄く困るんで

す……あ、でもちょっと不便なので、一時的にライゼンさんとお呼びしても宜しいですか？」
「それくらい別にいいけど」
「有難うございます。ではライゼンさん、何故この家の前に来たんですか？」
「え、それは……あれ、オレどうやって来たんだ？」
眉根を寄せたライゼンさんを見て、とてつもなく嫌な予感がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7813w/

「　　」を失くした魔女

2011年10月13日06時53分発行